

資料 2

昭和 53 年度、連絡票を配布するとき、各家庭に配布された通知文

保護者各位殿

昭和 53 年 7 月 18 日

玉村町立玉村小学校長

家庭連絡票（通知票）について

「通知票は、児童の学習の状況や成果、あるいは、行動、正確、健康などの状況を家庭に連絡し、学校と家庭とが協力を密にして、児童についての理解を深め、教育の効果を高めるものといわれている。」

（教育経営事典より）

本校においては、長いこと通知票を廃止してまいりました。それなりの動機もあり、理解と協力によってささえられてきたものと思います。本年度、これまでの経緯など、さまざまな問題を解明するなかで、学期末に児童ひとりひとりに対して、家庭連絡票を出すことに決定いたしました。つきましては、次の 4 つの事項について、保護者のご理解をいただき、これを契機に一層のご協力をお願い申し上げる次第です。

1. 家庭連絡票を通して、こどもを理解し、こどものもつ可能性をみつけていただきたい。

これまでの授業参観、個人カード、学級通信などにより、こどもの姿をご理解いただくよう努力してまいりました。これらは、それなりの効果があったものと信じます。これに学期末の家庭連絡票により、個々のこどもについて、より具体的な事項について認識していただき、こどものもつ可能性を正しくみつめていただきたい。

2. 児童にあっては、自己をみつめさせ、はげましと意欲づくりの糧（かて）としたい。

この家庭連絡票により児童が、自己の姿をよくみつめ、これから何をすればよいかを考えさせ、自己へのはげまし意欲づくりができることを期待したい。

3. 学校教育について、一層の理解を深めていただきたい。

教育は速成的なものではありません。長い月日と年月をかけてこそ、こどもは成長していくものと思います。家庭連絡票はこどもの姿であると同時に、こどもの汗と努力の結晶です。現象だけをとらえ、こどもをしかる材料にしてはならないと思います。こどもは一生懸命頑張っています。こどもへの賞賛とはげましを与えることを忘れてはならないと思います。また、教師はこどもの可能性の限界を一步でも高めようと、それぞれの創意と工夫により努力しております。この家庭連絡票により、こどもの学習内容をじゅうぶん理解していただくと同時に、玉村小学校の教育に対してより一層のご協力をお願いいたします。

4. 教育評価のありかたを追求し、生きた家庭連絡票にしていきたい。

家庭連絡票は、学校から家庭への一方的な通告というものではない。児童を教育的により好ましく成長発達させるため、学校と家庭が協力していく橋渡しの目的をもつものと考えられます。この家庭連絡票が、こどもをよくしていく教育診断であり、よりよい処方せんが教師と保護者の協力で生まれることを願っています。

年 3 回の教育評価の機会を、教育計画や指導法の改善の場とし、家庭連絡票についても固定的なものせずよりよいものをめざしていく所存でございます。

家庭連絡票は、学期末にこどもを通して、保護者にお渡しするのが原則ですが、一学期については原案の作成、印刷等の状況から下記のようにになりました。ご承知おきください。

1 学年 全学級とも 7 月 20 日終業式

2 学年 1 学級 7 月 20 日、他の学級は 8 月 4 日

3 学年 全学級とも 7 月 20 日

4 学年 全学級とも 7 月 20 日

5 学年 全学級とも 7 月 27 日学年登校日

6 学年 1 学級 7 月 20 日他は 8 月 4 日

子どもは、日々学校において学習を受け、よりよい人間をめざし活動している。このひとりひとりの子どもは親にとってかけがえのない人間であり、その委託を受けている学校の果たす役割は重大といえよう。

現今、ひとりひとりに着目した教育のあり方や、落ちこぼれのない教育が叫ばれているが、これは的確に子どもの姿をとらえ、具体的な指導の手だてをもつこと以外に考えられない。そのひとつとして、日々の子どもの状態を父兄に知らせ、きめ細かい配慮によって伸ばしていくことも考えられよう。

また授業参観の様子から子どもの成長を判断してもらうことも大切であろう。

さらに学期の締めくくり（教育計画のトータルとして）として学習目標にどのくらい到達したかを父兄にその実情を知らせ、次学期への指導のめやすにしてもらう事も大切なことと考えられる。それは子どもを差別したり、子どもへの圧力となるような考え方を除去した教師と親の姿勢が条件となることはいうまでもない。

教育条件も次第に整い、97%の高校進学者や30%の大学進学者を考えると小学生における基礎学力の充実と好ましい人間性の育成はきわめて大きな課題といえる。

学校は先人の文化遺産の価値を後世の人達に正しく伝承し、しかもそれ以上の発展を願う継承の場である。1年生には1年生の時期に習得させ、2年に発展させたい。また高学年は、中学生への基礎として、学力においても、生活経験においても学習させてやりたいことが多々ある。これを学年ごとに目標をさだめ、学期の集約をはかり、ひとりの子どもを学校と家庭で支えあって伸ばしてやれる体制をもちたいと考える。

過去18年間の実績にプラスさせる意識から、次の提案をしたい。

- 1 学期末にひとりひとりのこどもの学習、生活の様子を父兄に知らせる
- 2 その評価法は到達度評価とする
- 3 内容は学年で協議し、共通なものを生み出す
- 4 印刷はすべて学校予算で行う
- 5 個人カードは継続して使用する